

「道」の行方と学校体育：武道と西洋格闘技との比較と学校体育

水月 晃* 檜崎 教子** 本多 壮太郎** 則元 志郎***

The Direction of the Way of Budo: A Study on Budo Within Physical Education Curriculum Through the Comparison Between Budo and Western Combative Sports

by

Akira SUIGETSU*, Noriko NARAZAKI**, Sotaro HONDA**

and Siro NORIMOTO***

要 旨

日本固有の文化として位置づけられている「武道」と類似した「西洋格闘技」を比較検討することにより、日本の伝統的な運動文化としての武道を再検討し、学校体育における指導内容・方法および教材化の視点等を抽出・整理することを目的とした。

日本武道と西洋格闘技を比較検討するために、武道教材としての空手道・柔道・剣道と各々の特徴が類似しているボクシング・レスリング・フェンシングを選択した。その結果、武道としての「本質」を中核に据え学修させることが重要であり、具体的な教材内容としては、武道における伝統技能と精神の象徴である「型（形）」を基盤に、礼に始まり礼に終わるといわれるように、相手を敬い己を律する「礼」と「克己心」、「義」の精神に基づいた正義やフェアプレイ、技の攻防後は然ることながら日常生活における「残心」の身構え・心構えを教材の中核として学修させることが肝要であると考えた。また、教師から一方的に教え込むやりかたではなく、学習者の実感に基づいた真の理解と授業の空間を超えた実践を目指して、適切な状況や場を設定すべく工夫が図られる「空間づくり」が必要であると導き出された。

Key Words：武道の「道」の行方、空手道、柔道、剣道、体育

1. はじめ

中学・高校体育科の武道領域の指導内容には、他運動領域同様の「技の名称や行い方」だけでなく、武道の位置づけとして「武道は、武技、武術などから発生した我が国固有の文化」とし、

「武道の特性や成り立ち、伝統的な考え方（行動の仕方）」が明示されている。

日本固有の文化としての位置づけであるからこそ、日本以外の運動文化との比較、特に類似した運動（スポーツ）文化との比較が重要であることはいうまでもない。しかし現状は、他のスポーツ領域と変わらない内容、つまり技術指導を中核に据えることが多い。

武道は、剣術・柔術などの古武術から格技を

*崇城大学総合教育センター 准教授

**福岡教育大学保健体育ユニット 准教授

***熊本大学 名誉教授

経て現在の武道へと継承・発展されてきている。いずれも国際的普及が行われており、多くは国際化され、スポーツ化されているものも多い。一方、西洋生まれの格闘技もスポーツ化されているものも多い。

その基礎となる武士道は、武士の間で形成された道徳ということができる。それは、江戸時代に儒教（特に朱子学）を基礎に発展し明治以降、国民道徳として強調されてきた。基本的に主君に対する絶対的忠節を重視し、犠牲・礼儀・質素・儉約・尚武などが求められる。

一方、武士道とよく比較される騎士道は、中世ヨーロッパにおける騎士階級の者が従うべき行動・道徳規範と捉えることができる。また、騎士道はキリスト教および団結精神の影響下に発達したもので、敬神・忠誠・武勇・礼節・名誉の奉仕などの徳を理想としている。

武士道と騎士道の比較は、宗教が大きく関わり、運動（スポーツ）を対象とする体育授業では難しいので、比較対象を「武道と西洋格闘技」とした。

そこで本研究では、これらの背景・精神、継承・発展過程および現状を比較することにより、「国際的普及」「国際化」「スポーツ化」などを検討し、日本の伝統的な運動文化としての武道を再検討すると同時に、学校体育における指導内容・方法および教材化の視点を探ることを目的とした。

2. 方法

日本武道と西洋格闘技を比較検討するために、武道教材としての空手道・柔道・剣道と各々の特徴が類似しているボクシング・レスリング・フェンシングを選択し、比較検討することとした。

- (1) 空手道とボクシングとの比較検討
- (2) 柔道とレスリングとの比較検討
- (3) 剣道とフェンシングとの比較検討

上記の比較検討から学校体育における指導内容・方法および教材化の視点等を抽出・整理する。

3. 結果

(1) 空手道とボクシングとの比較検討

空手道の起源は、沖縄を発祥の地として、身にいっさいの武器を持たずに、突き、蹴り、打ちなど全身のあらゆる部位を使って外敵から身を守ることを目的として誕生した武術である。空手の原形は、琉球から伝承された格技「手（ティー）」と中国から伝来した格技の双方の長所を取り入れて発展したものである¹⁾。

その当時、空手は「唐手（トウデー）」と呼ばれていた。外敵から身を守る「徒手空拳」としての武術を、師匠から弟子へと継承してきた。この技術発展の背景には、二度にわたる「禁武政策」があり、護身の手段として体系化されたものが唐手（空手）であった。ゆえに「空手に先手なし」といわれている²⁾。

ボクシングの起源は、紀元前4000年ごろ、エジプトで格闘技として軍隊で教えていたことが、発見された象形文字から判読されている。また、古代ギリシャではボクシングをプリズムと呼び、紀元前688年の第23回古代オリンピック競技から、その公式競技であった。その後、古代ローマ時代になると享乐的なローマ市民はプリズムを見せ物にし、死者も出る凄惨な光景を見て嗜虐的なスリルを楽しんだ。しかし、西ローマ帝国の滅亡とともに姿を消した。近代ボクシングの誕生は、18世紀初頭のイギリスにおいて、ジェームス・フィッグが素手の拳を使った闘争術を考案したのが始まりといわれている。フィッグによって創案された試合形式は、グローブやリングなどはなく勝敗は降参した時に決められたのである。そして、勝者には賞金が与えられた²⁾。

双方、武器を持たずに相手を倒すという同じ目的・手段をもつ格闘術ではあるが、「護身の手段（防御）」としての空手と「闘争の手段（攻撃）」としてのボクシングとでは本質的に大きな違いがあるといえる。

空手道の普及については、1922年、東京で開催された第1回体育展覧会で「船越義珍」が形の演武を披露したのが「唐手（空手）の本土

初公開」といわれている。その後、学生達を中心に普及・発展し、1950年になると流派・会派の垣根を超えた「日本学生空手道連盟」が設立された。1957年には成文化された試合・審判ルールに基づき「第1回全日本学生空手道選手権大会」が開催されている。また、1964年には全日本空手道連盟の結成、1970年には世界空手道連合が結成され、第1回世界空手道選手権大会が日本武道館にて開催されている²⁾。

ボクシングの普及は、1743年にフィッグの高弟であるジャック・ブロートンが、ブロートンコードと呼ばれる史上最初の6か条からなるルールを公表し、ボクシングの近代化に大きく貢献した。また、ルールの考案と共に危険防止のために練習用グローブも開発された。1866年になると、グローブをつけて試合をする、四角形のリング上で試合をする、1ラウンドを3分間としあいだに1分間の休みをおく、ダウンして10秒以内に起きあがらない場合はノックアウトとし勝敗を決定するなど、12か条からなる画期的な新ルール「マーキス・オブ・クインスベリールール」が生まれた。現在のルールの基盤はこれによって生まれ、ボクシングの安全性が高くなり攻防の技術においても、おおいに開発されることになった。また、ボクシングがオリンピック大会の正式競技となるのは、1904年の第3回オリンピック大会からである。日本におけるボクシングの普及は、アメリカでプロボクサーとなった「渡辺勇次郎」が1921年に日本拳闘倶楽部を立ち上げ、青少年にボクシングを教えたのが始まりといわれている。門下生である学生達は、1925年に「全国学生拳闘連盟」を設立し、「第1回全国学生拳闘選手権大会」を開催している²⁾。

上記のことから、空手道およびボクシングの国内普及については、双方とも学生が主体となって広まり発展したといっても過言ではないと考えられる。その要因としては、護身術としての空手の「型」、闘争術としてのボクシングの「型」が機能的にも形態的にもぎりぎりに単純化し洗練され「正統なる技術の継承」がなされた。また、その「型」に基づき「ルールの成文化」を図り競技化された。そして、学生を母

体した「団体としての組織化」がなされ、国内への普及・発展に繋がったことなどが挙げられる。

杉山³⁾は、ルールを策定するにあたって、発祥した国に生きる人々の「物事の考え方」や「行動の仕方」がスポーツのルールやマナーとして大切にされていると述べている。また、大坪⁴⁾は「型」について、正統なる技術・精神を継承するためには、技術の精髓を集約し、段階的に体系化された「型」が必要になってくる。その「型」とは、機能的にも形態的にもぎりぎりに単純化し洗練された法則性や規則性を持つものでなければならないと述べている。

そう考えた時、空手における正統なる技術・精神の継承は、外敵から身を守る徒手空拳としての武術を「護身術」としての「型」に集約し、厳密な作法にのっとり勘やコツなどの主観的な要素を、師から弟子に以心伝心的に伝授し「経験主義的」に継承してきたことが特徴としてあげられる。

一方、ボクシングの正統なる技術・精神の継承は、興行的要素も強く含まれる中で相手を制圧することを最大の目的とし、強靱な肉体と精神、洗練・パターン化された技術を「闘争術」としての「型」に集約し「合理主義的」に継承しているところに大きな違いがあるといえる。

そこで、空手道の学校体育における指導内容・方法および教材化の視点について考えてみたい。

空手道の学校教育との関わりは、1901年、「糸洲安恒」が唐手（空手）に体育的な「護身術としての価値」「精神修養としての価値」「体育上より観たる価値」を見出し、5つの基本型を創作し、近代唐手（空手）の基礎を作ったことに始まる⁵⁾。

2019年2月現在、平成24年度からの学校体育武道必修化に伴い、空手道は全国で272校⁶⁾の中学校で採用されているが、武道教育として求められているもののひとつとして、杉山³⁾は次のように述べている。武道の種目にかかわらず共通していることは「礼」を厳格に守っていることである。武道における「礼」は、単

に相手を尊重するだけの意味をもった行動ではなく、自分自身を高めることとの関連でとらえられており、厳格な形式を大切にし、それに従うところに意義を求めていると考えられる。厳格な形式に従うことは、自己を制御することであり、その自己制御が、人間形成にとって重要であり、そのことが人間としての生き方、在り方を求めるという、いわゆる「道」を重視することにつながるという考え方である。武道の練習や試合において、「礼」を重視し、それを正しく実践することを心がけるということは、相手を尊重するという謙虚な心と、その上に自己を制御するという「克己心」を育てることを目指している。

空手道の「正統なる技術と精神」は、護身的手段（防御）としての「型（形）」を修練することにより、自己の内面を磨き身体各部の発育増進を促すことができると思われる。とくに「空手に先手なし」といわれるように空手の形の第一手は必ず「受け」から始まる、これは空手道を志す者の心の要でもあり謙虚たるべき戒めでもある。また、その中核である「残心」については、心身一如であり「次に備える・備わっている」という、これから起こり得る事象に対し、隙のない心構え・体勢・行動が重要となってくる。いわゆる「危機を察知し未然に防止する姿勢を維持する」という危機管理能力にも繋がってくる。

上記のことを踏まえ、武道としての「礼」「克己心」の修得は勿論のこと、空手の「型（形）」に秘められている「正統なる技術と精神」「残心」を教材の中核として取り入れていく必要があると考える。

指導内容としては、基本技術は勿論のこと、「型（形）」により伝統技能を修得し、人間形成と自己表現能力を育む。約束組手により相手と向かい合い・自己と向かい合うことにより克己心と危機管理能力を修得し、徳性を磨くことができる。このことは、自ら体現し継続（反復）・協調することが肝要であると考えられる。

(2) 柔道とレスリングとの比較検討

まず初めに、柔道とレスリングとの類似点は、体重別制の対人競技としてオリンピック種目となっていること、レスリングでは投げ技を主に使うグレコローマンと、固め技を主に使うフリースタイルに分類されているが、柔道ではその両方が使用されていることが挙げられる。

一方、柔道とレスリングとの相違点は、戦場での組討ちに始まった柔術が柔道の起源であること、柔道は柔道衣を極度に利用して相手の体を制することが挙げられる⁷⁾。その他にも、攻防の姿勢やポイントの判定が大きく異なる。まず、レスリングのフリースタイルにおける攻防では、立ち姿勢においてタックルを狙うため、足幅が広く前傾に構える姿勢が中心となる。柔道ではこの姿勢を「自護体」と呼び、主に防御姿勢として捉えられている。そのため、国際柔道連盟試合審判規定⁸⁾では、「立ち姿勢において、組んだ後、極端な防御姿勢をとること」を軽微な違反として指導とすることが明記されている。また、以前は「立ち姿勢において、片手、または両手、もしくは片腕、または両腕を使って、相手の帯から下を攻撃する、または防御するすべての行為は「反則負け」とする」と定められていたが、2018年4月より上記の行為は軽微な違反として指導に改められ、2020年の東京オリンピックまで適用される。そのため、柔道の試合では、攻撃防御のどちらにも瞬時に対応できる「自然本体」で構え、正しく組んで技をかけることが推奨されている。

次に、レスリングの固め技によるポイントの判定では、相手の背後につくこと、相手をローリングすること、相手をフォールすることによって、それぞれ獲得できるポイントが異なる⁹⁾。一方、柔道では上記のうち相手をフォールする（抑え込む）こと以外の行為では、ポイントの獲得に至らないのである。さらに、レスリングのフォールは、相手の両肩を1秒マットにつけた場合、最高の5ポイントを獲得するが、柔道では抑え込みを行い10秒以上で技有り、20秒で一本勝ちとなるため、ポイントの判定は大きく異なるのである。その他にも、柔道の

固め技では自分の背中を畳につけた姿勢から、相手を返して抑え込むことがあるが、レスリングでは自分の背中がマットについた場合、相手にポイントが与えられる。

佐々木ら¹⁰⁾は柔道の独自性について、「まず襟と袖を持って組んで行う点にある」と述べている。また、着衣の点から「袖の長い柔道着を着用している。そのため、自然体の構えが可能となり、また引手でもって相手の体を崩すことが、勝敗を決する決め手となった」ことを挙げています。

さらに、佐々木ら¹⁰⁾は柔道の原理について、自然体の理・柔の理・崩しの理という3つの要素があり、一本を取るための必須の条件であると述べている。まず、自然体の理とは、瞬時に攻防するのに最も適した姿勢であり、「武士道の精神を表す「品位」や「美しさ」が盛り込まれ、見る人に感動を与えた」と記されている。次に、柔の理とは、「柔よく剛を制す」原理と考えられ、「どんな相手の攻撃力にも無理に逆らわず、その力を無効にする体捌きの大切さをいっている」と述べている。最後に、崩しの理とは、柔道の独特な攻撃法であり、襟と袖を持って相手を崩すことにより、小さな力で最大の効果を生むことが可能となることを示唆している。このように、柔道では自然本体で構えることや、柔道の原理を手段とし、「一本を取る柔道」を目指すことが求められているため、レスリングと比較すると攻防の姿勢やポイントの判定は大きく異なるといえる。

ここまで、西洋格闘技のレスリングとの比較を通して、武道としての柔道の本質とは何かについて論じてきた。ここからは、柔道が国際化したことによって、柔道の本質を揺るがしかねない体重別制の導入に至った経緯を振り返ることとする。

柔道は、戦前から無差別で行われていたが、戦後に国際化をめざす風潮が高まり、体重別により競技条件を平等にする考えが浮上してきた。1961年に東京オリンピック競技委員会は、アメリカや西ドイツで実施されている体重区分や、柔道に一番近いレスリングを参考に日本案を作成した。同年12月の国際柔連総会において、

無差別の他に軽量級（68 kg 以下）、中量級（80 kg 以下）、重量級（80 kg 超）の3階級が決定された⁷⁾。その後、1965年の国際柔連総会で、新しく2階級を加えることが決定され、1977年には7階級となり、20年後の1997年に現在の階級へと変更された。体重別制のあり方について、当時の日本代表団の考えを要約すると、体重別制の細分化は、技術の進歩を遅らせ、柔道の優れた特性を失うのではないかと危惧している様子が示されている。また、「柔道は柔道衣を極度に利用して相手の体を制する効果をより大きくさせ得る。よって柔道は、レスリングなどに比べて体重の差の影響が少ないといってよい」ことなどを取り上げ、特に慎重な配慮が必要であると記している⁷⁾。日本の柔道は無差別で行うことにより、小さくて非力な者が大きくて強力な者に勝利するための優れた技術が開発され、それが柔道の本質であると信じられていた。柔道が国際化を目指すためには、自国の意見だけでなく、他国の意見も傾聴し、歩み寄る姿勢が求められる。その上で、柔道の本質とは何かを見失わず、柔道が魅力あるものとして世界中の人々から親しまれ、今後も発展していくことが期待される。

最後に、平成24年度より中学校で武道が男女ともに必修化され、学校体育の柔道で何を教えるのかについて検討し、まとめとしたい。

田中ら¹¹⁾は、柔術の目的は相手を殺傷するという勝負であったが、講道館柔道の目的は体育・勝負・修心であると述べている。初めに、体育法とは身体四肢の働きを自在にすることが目的である。次に、勝負法とは勝負を決する方法であり、投げ、当て、固めに分類される。最後に、修心法として徳性を涵養すること、智力を練ること、柔道勝負の理論を世の百般の事に応用することを挙げている。

まず1つ目の徳性を涵養することであるが、その理由として、「柔道は争い事であるから、始める時も別れる時にも礼を大切に、相互に敬意を表す心持ちを大切にしたいものである」と述べている。また、2つ目の智力を練ることでは、柔道の修行と観察、想像、大量の関係を以下のように記している。柔道の修行をす

る上で観察を怠らない者が進歩も早く、心の範囲が狭いと良い手段が生まれてこない。上手の位にいたるには、この想像力が必要であると述べている。柔道の技の進歩には、無闇に自説を守ってばかりいても進むことができない。柔道の修行によって、体と四肢との関係や力の入れ方、また心の扱い等を合わせて考える大量の精神が体得されると述べている。さらに、3つ目として、柔道勝負の理論を世の百般の事に応用することを挙げている。柔道勝負の教えに「自他の関係を見るべし」ということがあるが、勝負のことだけでなく、商業上のことや政治上のことにおいても必ず考えなければならないと述べている。その他にも、「先を取れ」や「熟慮断行」など、柔道勝負により体得したことは社会生活にも応用できることが記されている¹¹⁾。

運動文化として世界中に普及した柔道は、学校体育において勝負だけではなく、体育と修心に重きを置いた指導を心がけることが大切である。体育と勝負は、その他の運動教材でも目的を達成することができるが、柔道特有の教育的価値は修心にあると考えられる。特に、対人競技の柔道では相互に敬意を表すことが大切であり、相手を投げたり、相手に投げられたりすることから、道場内での学びは非日常であることを認識する必要がある。柔道の技術を習得する過程で、お互いに相手の痛みを理解し、力の加減を学び、感謝の気持ちが育まれると考えられる。

(3) 剣道とフェンシングとの比較検討

西洋の剣術と我が国の剣道において、それぞれの元々の使い手は騎士と武士である。塩入¹²⁾によると、騎士は封建制度における軍事組織の中心であり、主君に身を委ね、その旗の元で戦う小土地所有階級であった。一方で、武士は主君のかたわらにあって御用を伺うべく待機している者であり、戦乱の世での武力によるサービスを行う者であった。塩入¹²⁾はまた、騎士、武士ともに共通するのは、「Military Servant」として仕える者であったことを説明している。さらに、騎士、武士としての生き方

や教育システムともいえる騎士道、武士道についても主君への忠誠心やフェアプレイの精神といった共通する内容が読み取れる。

洋の東西を問わず、それぞれの剣術は歴史の変遷とともにその目的を変え、今日ではルールの遵守のもと安全に技の習得や深化を目指して行われる運動文化に昇華している。その一方で、片方の手や半身の姿勢で剣を操作するフェンシング、相手と正対する中で諸手で竹刀を操作する剣道に代表されるように、剣の使い方、戦い方は大きく異なっている。加えて、大きな違いの一つに日本の剣道における「残心」のルールや訓えが挙げられる。

まずルールの面から述べていくと、残心とは「打突した後に油断せず、相手のどんな反撃にもただちに対応できるような身構えや気構え」であり¹³⁾、有効打突の要件の一つとして定められている¹⁴⁾。このことを念頭に置くと、「充実した氣勢、適正な姿勢をもって、竹刀の打突部で相手の打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるものとする」という有効打突の要件を満たすための剣道の攻撃とは、「『したい-させたくない』対人的攻防関係の中で、どのように打突の機会をつくり、どのように打突し、どのように完結させるとともに残心につなげるか」を課題とするものであると捉えられる。

一方で、フェンシングの場合、「フルール」「エペ」「サーブル」のいずれの種目であっても、有効面（「フルール」の場合は両腕と頭部を除いた胴体部分、「エペ」の場合は全身、「サーブル」の場合は両腕を含む上半身）を、一定以上の圧力を伴った剣による攻撃で触れることで色ランプが点灯し、電気審判器によって判定がなされる¹⁵⁾。ここには剣で突いた後の身構えや気構えについての規定はない。「Japanese fencing」と訳されることもある剣道であるが、この残心の有無において剣道とフェンシングは大きく異なるところである。また、これについてはフェンシングだけでなく多くの対人スポーツ、チームスポーツとも一線を画すものである。

次に、訓えの面から述べていくと、剣道では、有効打突を獲得した後や勝利の宣告を受けた後

に喜びを身体や竹刀で表現したり、判定や勝敗の結果を受け入れない否定的な態度を示したり、審判に異議を唱えたりした場合、有効打突の判定を取り消されたり、相手に二本を与えて退場になる場合がある¹⁴⁾。これは、勝利の後に奢らず高ぶらず、相手を思いやる心や、敗北の後に卑屈にならず相手を認め、称える、自分の弱点を教えてもらったことに対する感謝の心の育成を背景とするものと捉えられる。何が起き、どのような結果になろうと一時の感情や状況に流されることなく、「打って反省、打たれて感謝」といわれる考え方や行動が求められる。残心の訓えとして心に残しておくべきことは自分の成長を阻害する「隙」を作らず、「未来に向けた備え」をすることにあり、これからの自分の技能の向上や人としての成長につながるよいうにという、「剣道の理念」に基づいた修練の在り方を示すものである。

以上、日本の剣道における残心のルールと訓えについて述べてきた。上記を踏まえて、学校体育における剣道授業を通しては、残心をどのように学習内容として授業に組み入れ、学習者のどのような学びと実践が期待されるようになるのかについて考えてみたい。

競技におけるルールとしての残心は、単に打った後は相手に向かって中段に構えるといった形だけの約束事にするのではなく、その意味を理解に基づいた実践が求められる。訓えとしての残心の理解と実践においても、剣道に専門的に取り組む修練者に求められるような考え方や行動を理念や理論を振りかざし、大上段に構えた人間形成論のようなかたちで学習者に教え込むものではない。先行研究¹⁶⁾では、学校体育における武道の「道」の内容として相手を尊重する心や克己心、「義」の精神に基づいた正義やフェアプレイを求め、実践を促すためには、学習者の「実感」に基づいた学習展開の工夫が重要であるとの指摘がなされた。残心の訓えについても理解に適した適切な場や状況の設定や具体的な実践の在り方についての提示や、実際の実践を促す課題の設定などの工夫が必要となる。

以下では、筆者の一人が実際に取り組んでい

る残心の訓えの活用例について紹介する。中学校第1学年を想定したものであり、「キーワード」となるのは、「未来に向けた備え」としての「次」である。

授業を通しては、基本動作や基本となる技の学習の中で上記に示したルールとしての残心や勝敗の結果に対する残心の訓えが指導され、学習されていく。加えて、授業のまとめや振り返りの場面では、「今日の残心」として残心の広がりが見られていく。

写真1～3は、「今日の残心」の例を示すものである。写真1は、面の取扱いや置き方とその意味について示したものである。面や小手を上にもせて自分の右斜め前に置くことで座礼ができるスペースができ、「次」の自分の行動がスムーズになり、正しく座礼を行うことができる。また、面金が強く床面に接するような置き方をせず、大切に扱うことで「次」の人が安全に道場や体育館を使うことができる。これらのことを理解させ、実践させるようにすることをねらいとしている。



写真1. 残心の訓えの例①

写真2は、剣道具の片付け方とその意味について示したものである。授業で剣道具を使用した後は、「次」回、あるいは「次」の人が気持ちよく使えるように、きちんと片づけることの意味を理解させ、実践させるようにすることをねらいとしている。



写真2. 残心の訓えの例②

写真3は、靴の置き方とその意味について示したものである。靴入れにきちんと入れることや、靴入れがない、あるいは靴入れに既にスペースがない場合は、自分が出ていく方向に靴の先を向けて揃えて置くことで、「次」の行動がスムーズになる。また、次（後）の人のためにスペースが確保され、次（後）の人も周りの靴に習ってきちんと揃えて置くことが期待される。これらのことを理解させ、実践させるようにすることをねらいとしている。

授業の振り返りやまとめは、次の授業のみにつながるものではなく、「生きて働く知識・技能」として授業外での活動につながるもの、汎用的な知識・技能として他の場面での実践や応用につながるものであるべきだと考える。「今日の残心」ではこの点を踏まえ、計画・実践されるものであり、その効果が期待されるものである。次回、この点についてももう少し深く掘り下げてみたい。



写真3. 残心の訓えの例③

4. おわりに

本研究では、日本固有の文化として位置づけられている「武道」と類似した「西洋格闘技」を比較検討することにより、日本の伝統的な運動文化としての武道を再検討し、学校体育における指導内容・方法および教材化の視点等を抽出・整理することを目的とした。

「武道」と「西洋格闘技」を比較検討してみると、洋の東西を問わず、普及の要因としては、それぞれの「型」をベースに継承・発展がなされたことが窺える。この「型」とは、技術の精髓を集約し、段階的に体系化されたものであり、機能的にも形態的にもぎりぎりに単純化され洗練された法則性や規則性を持つものである。と大坪⁵⁾は述べており、その国々の時代背景・風土・民族性が「型」に集約され普及・発展してきたことが窺える。また、国際化・スポーツ化されるに至っては、公平で安全なルール of 成文化、世界に普及するための組織化が必須であった。そのルール策定にあたっては、スポーツが発祥した国に生きる人々の「物事の考え方」や「行動の仕方」をそのスポーツのルール、マナーとして大切にされている。と杉山³⁾が述べているように、その国々の正統なる技術と精神が各種スポーツのルールを通じて世界中に浸透し普及・発展したと窺える。

上記のことから、「型」を媒体に継承・普及・発展してきたが、それぞれの「型」の扱いが洋の東西においては、大きく異なっている。武道においては、厳密な作法にのっとり勘やコツなどの主観的な要素を「型」の中に集約し、「型」の本質を守りながら師から弟子に以心伝心的に伝授し経験主義的に継承・発展してきた。しかし、西洋格闘技は、洗練された技術をパターン化・簡略化し「型」の中核となる本質をより合理化・客観化し「型」を破りながら合理主義的に継承・発展してきた。

その差異としては、ルールの中に顕著に表れている。武道においては、剣道や空手道に象徴される「残心」が一つの特徴としてあげられる。

全日本剣道連盟¹³⁾によると、残心とは「打突した後油断せず、相手のどんな反撃にもた

だちに対応できるような身構えや気構え」であると定義されている。このことは、心身一如であり「次に備える・備わっている」ということであり、危機を察知し未然に防止する姿勢を維持するという危機管理能力でもある。ただ、柔道においては、「残心」の在り方をルールにおいて規定していないが「相手を投げる際には引手を取る」「投げられる際には受け身を取る」といったように「その後の備えである身構えや気構え」を行動の中で示している。

もう一つの特徴としては、柔道や空手道における体重別制の導入があげられる。木下¹⁷⁾は、本来の武術は、生死を賭けた実用の術であるから、術の向上を目指した身体的訓練を重視する。同時に、死の恐怖に直面しながら術を發揮できる強固な死生観につながる精神的訓練も重視する。さらに、術に裏付けられた至高の人格・精神への到達を希求する。と述べているが、相手を殺傷するための技術と精神が武道の根幹にあると捉えるならば、体重別制は意味を持たないものとなる。尾形ら⁶⁾は、体重別制の細分化は、技術の進歩を遅らせ、柔道の優れた特性を失うのではないかと危惧している。と述べており、柔道や空手道の国内大会における無差別級の試合は、武道としての本質をルールへ内在させ、その「型」を守りながら継承・発展させていることが窺える。

一方、西洋格闘技の最たるものとしては、フェンシングの電気審判器の導入と装具や防具の進化があげられる。安全・公平・客観化するために、剣の形状や構造を変更し剣の操法や技術・技の攻防に大きな変化をもたらす改革していることは、「型」の本質を合理化・客観化し、その「型」を破りながら合理主義的に継承・発展させてきたと窺える。そう考えた時、本質を「型」へ内在的に集約・洗練し発展させていく武道と、「型」を破りながら外在的に変革を加える西洋格闘技とは本質的に大きな違いがあるといえる。

そこで、日本の伝統的な運動文化としての「武道」を学校体育の教材として扱うならば、武道としての本質を中核に据え学修させることが肝要であると考えられる。具体的な教材内容とし

ては、武道における、伝統技能と精神の象徴である「型（空手道の形、講道館柔道形、日本剣道形）」を基盤に、礼に始まり礼に終わるといわれるように相手を敬い己を律する「礼」と「克己心」、「義」の精神に基づいた正義やフェアプレイ、技の攻防後は然ることながら日常生活における「残心」の身構え・心構えを教材の中核として学修させることが肝要である。その際には、先行研究¹⁶⁾でも述べたように、教師から一方的に教え込むやりかたではなく、学習者の実感に基づいた真の理解と授業の空間を超えた実践を目指して、適切な状況や場を設定すべく工夫が図られる「空間づくり」が重要となってくる。その中で、学習者同士が協動的に取り組み、仲間の存在が互いに与える影響を実感し、「相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を守ろうとする」ことが図られ、「伝統的な考え方」の理解が促されるのではないかと考える。具体的な授業実践モデルについては、今後の課題としたい。

5. 参考文献

- 1) 真野高一, 多田幸信, 江川政成, 豊嶋建広, 飯出一秀, 藤田幸雄, 久富登喜雄, 荒川通 (1996) 空手道教範, 財団法人 全日本空手道連盟: 1
- 2) 岸野雄三 (1994) 最新スポーツ大事典 (第5版), 大修館: 186-191, 1177-1180
- 3) 杉山重利 (2002) 武道論十五講, 不昧堂出版: 10-15
- 4) 大坪壽 (2002) 武道論十五講, 不昧堂出版: 18-23
- 5) 小山正辰 (2011) 空手道の教育力, BAB: ジャパン: 129-131
- 6) 財団法人 全日本空手道連盟 (2019) NICE KARATE LIF, Vol. 221: 13
- 7) 尾形敬史, 小俣幸嗣, 鮫島元成, 菅波盛雄, 競技柔道の国際化～カラー柔道衣までの40年～ (1997), 不昧堂出版: 152-157
- 8) 国際柔道連盟, 国際柔道連盟試合審判規定 (2016): 30-33
- 9) 日本レスリング協会公式サイト (2016) https://www.japan-wrestling.jp/wrestling_rule/ (参照日 2019/06/17)
- 10) 佐々木武人, 柏崎克彦, 藤堂良明, 村田直樹

- (1993) 現代柔道論 国際化時代の柔道を考える, 大修館書店: 59-64
- 11) 田中守, 藤堂良明, 東憲一, 村田直樹 (2000) 武道を知る, 不味堂出版: 152-158
 - 12) 塩入宏行 (2004) 騎士と騎士道, 全国教育系大学剣道連盟編, 教育剣道の科学, 大修館書店: 50-51
 - 13) 全日本剣道連盟 (2000) 剣道和英辞典, サトウ印書館: 111
 - 14) International Kendo Federation (2006) The Regulations of Kendo Shiai and Shinpan, The Subsidiary Rules of Kendo Shiai and Shinpan, The Guidelines for Kendo Shiai and Shinpan, International Kendo Federation: 5, 7, 14
 - 15) 国際フェンシング連盟 (2019) 競技規則 (日本語版 2019年2月更新版)
<http://fencing-jpn.jp/cms/wp-content/uploads/2019/03/bb04c9b0a7d0dfa0558e9e6580830d22.pdf>
(参照日 2019/03/14)
 - 16) 植崎教子, 水月晃, 本多壮太郎, 則元志郎 (2018) 「道」の行方と学校体育: 武道で何を教えるのか, 福岡教育大学紀要, 第67号, 第5分冊: 85-93
 - 17) 木下秀明 (1998) 体育の科学4月号, 杏林書院: 272-278